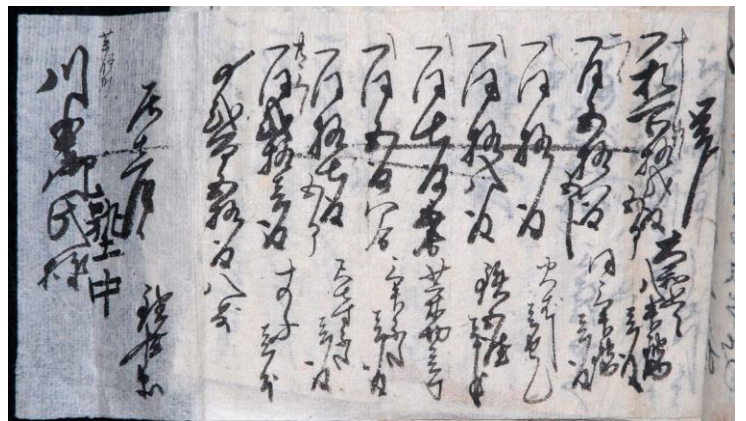


## 川本幸民に見る「夜明け前」

天保7(1836)年5月、川本幸民はある事件に連座し「武家奉公差し止め」として三田藩士の身分を停止されます。5年後に一旦は複籍しますが、結局その才能に注目した薩摩藩、次いで幕府に招かれて、幕臣の開成所教授として幕末を迎えました。彼を語学の師と仰いだ福沢諭吉やいま話題の坂本龍馬など、幕末に名を残す仕事をした人たちには「脱藩」した人たちが少なくありません。

川本幸民は幕末に江戸からふるさと三田に戻り洋学の塾を開きます。市史第6巻16号史料によれば天神に移転した<sup>こんしんじ</sup>金心寺の跡地(屋敷町)に彼が入ったのは、通説より早い慶応3年(1867)年9月のことだったようです。この記録を残した<sup>かぎやじゅうべい</sup>鍵屋重兵衛は三田本町の金物商です。同家には火ばしなど荒物の掛売りの記録(写真)が今も残されています。宛先は川本御氏、そして塾中と書き加えられています。この記録は川本幸民が塾で使う金物を個人名義で辰(明治元=1868)年の11月に購入したことを示しています。ちなみに今に残る入塾者の名簿も同月から初まっていますので、この買物は実質的な開塾の準備だった可能性があります。



「川本御氏」あての納品書

この当時、藩主<sup>くきたかよし</sup>九鬼隆義らは福沢諭吉を通して郷土の「人財」として川本幸民を意識していたはずですが、写真の記録からは彼の塾はあくまでも私塾扱いだったと考えられます。また市史第6巻7号史料には明治2年4月の藩主一行の上京に川本幸民も同行したことが記されていますが、彼の扱いは「<sup>ともほか</sup>供外」です。これらが藩籍を離れた者に対する身分制の現実でした。

前回紹介した通り福沢諭吉の示唆を受けた九鬼隆義は新しい国づくりに身分制は無用と考えており、同年7月には三田藩における身分制の廃止を決議しています(同書2号史料)。身分制のはざままで学究の世界に生きてきた川本幸民は、全国に先駆けた郷土の「夜明け」をどのように感じたのでしょうか。

「夜明け前」の変革期に三田藩士の枠を越えた川本幸民は、その卓越した語学力と探究心とに注目した人々の知遇のもとで「化学の祖」として花開いたのでした。